
ひよりみ

亜倉 暮亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひよりみ

【Nコード】

N2932Z

【作者名】

亜倉 暮亜

【あらすじ】

日本の妹、桜がアジアの人たちと、ひたすらぐぐただらだら一緒に雑談したりお散歩したりお茶したり歌ったりするお話。

もちろん桜はオリキャラです

ふゆぞら(前書き)

中国さんのターン。

ふゆぞら

最近すっかり冷え込んだというのに、菊兄は縁側に出て日向ぼっこをしていた。日向ぼっこじゃありません考え事をしてるんですとか言ってたけど、絶対嘘だ。私が時々様子を見に行くと、こっくりこっくり頭を揺らしているか、目を閉じて微動だにしないかのどちらかなんだもの。

確かに日向は暖かいけど、やっぱり空気は冷たいし、私としては部屋に引きこもりたい。

という訳で私は、ごろんと畳に寝そべって、つけっぱなしのテレビに目もくれずに携帯ゲーム機を起動させた。ポケットサイズのモニターたちとの愉快的冒険を始める、その前に菊兄の様子を見るのは忘れていない（時々雨降っても気付かずに眠り込んでたりするから）。

障子を細く開けて見た菊兄は、いつもどおりに、膝にぼちくんを乗せてこくこく頭を振っていた。ほのぼのしていて、見ているこっちが和む光景だ。しかしまあ、こちらからそれを指摘すると怒るけど、やっぱりおじいちゃんだ（菊爺ー）。

そうして寝そべり直し、私の分身を動かし始めた時だった。

「好！桜、それはもしや噂のポケンあるか？」

縁側とは逆の襖から、Tシャツ姿の男性が現れた。

「当然のように不法侵入しないで耀兄」

「あいやー、確かに正門からは入ってないあるが、菊にはちゃんと了承をもらってるあるよ」

菊兄が？

「『っつうおおっ！こんな所に菊が！お、お邪魔するあるよ！』っ

て言ったら何回も頷いてたある」

「それうとうとしてただけだよ！」

縁側に面した庭から塀越えて入ってきたのかこの人。しかも（縁側の方の障子から入ってこなかったってことは）わざわざ玄関口を経由してこの部屋に来たとな？ていうか耀兄、うっかり余計な所まで再現してしまったらしいセリフで、不法侵入する気満々だったことが露見したんだけど。

「っていうか何の用？」

「別になんかあるよ。会いたくなつたから来たある」

彼女かよ！

はあ、とため息をついて、私はゆっくり立ち上がる。色々礼儀作法のなっていないイマドキの女子高生な私だけれど、客にお茶を出す位の良識はあるのだ。

「お茶持つてくるから、そこ座つてて」

「お茶請けはりんごでいいあるよ。あ、あとうさぎにするある」

「あらゆるツツコミを省いて、っていうかむしろ包括して言うけれど、なんで!?!」

卓上には既にみかんがあるというのに、その上うさぎにするという手間をかけさせるのは何故なんだ（かわいいものが好きだからですかそうですか）。なんて言いながらもりんごあったかな、と考えつつ部屋を出る私なのだった。

「おー、こいつはかわいいあるなー」

「あんま見ないですよ、耀兄」

「なんであるか。ていうか『にーに』って呼ぶよろし」

「ポニ タっぱい何かができそうだから」

しかもかわいさは半減するっていうな。(呼び方の件はスルー) 携帯ゲーム機を、できるだけ耀兄から離してプレイしながら(でも止めない)、私は卓上のみかんに手を伸ばす。耀兄の手には本人の希望通りうさぎりんごがある(がんばった)。

「『にーに』って呼ぶよろし」
しぶとかった。

「嫌だよ」

「なんであるか!」

「嫌だから」

なんていうか、そもそも『にーに』呼びにあまり惹かれない。『にーに』って呼ぶ妹がかわいいとは、ちよっと思えないんだよね。そのうえ自分で呼べなんて勘弁願いたい。

なので私は耀兄が何を言おうとどこ吹く風で聞き流した。しばらくすると、耀兄も諦めたのか、再びうさぎりんごを頬張りだした。

「…しっかしまあ、寒いあるなあ」

「…そりゃTシャツ一枚じゃ寒いでしょうよ」

なんていうか、その、来た時から気になってたけど、あえて触れずにいたんだよ。だって万博とか書いてて、いかにも耀兄が好きそうな感じなんだもん! よれよれだけど、それが却って、オレは好きで着てるんだ文句言う的な主張してたんだもん!

「別に好きでこんなかつこしてるんじゃないあるよ」

「違ったらしい。」

「じゃあ何…?」

とりあえず壁に掛けていた、菊兄の半纏のスペアを手渡ししながら言うと、耀兄はあからさまにうんざりした表情を浮かべた。

「いや、それはまあ…ごによごによって感じあるよ」

ごまかすのがめちゃくちゃ下手な人だった。『ごによごによ』とか口ではつきり発音しちゃってるよ。

「まあ、そんなに言うなら、深く問うのは止めておくけど」

「さすが菊の妹あるな」

正確には妹ではないんだけど、日本人だからね（空気読むよー）。
「でもそれを言うなら、桜もその服は寒そうあるね。かわいいあるけど」

「これはまあ、アイデンティティみたいなもんだし」

ちなみに私の着ているのはセーラー服だ。『二次元』である私は今も昔も架空の物語の中心にいる『少女』として存在していて、いわば永遠の女子高生なのである。だから基本装備は制服なのだ（毎日同じ服ってこと。でも定期的にデザインはリニューアルしてる）。

とはいえ、別に制服は強制なのではなくて（第一誰が強制するというのだ）、私服を着たって何も問題はないのだけど、なんか、使命感がね。

「今度ワンピース型の制服にしようかな、とか思うんだけど、どんなのがいいと思う？」

「桜はかわいいから、なんでも似合うあるよ」

その返事は根拠がないに等しいから、却って信用できないんだけどなあ。

と、そこで「そうだ」と、耀兄は手を打った。

「桜、私の膝の上に座るよろし！そしたら桜も我もぬくぬくあるよ」
「嫌だよ」

そうだ、ってなんだよ。すごく脈絡がないんだけど。なんだその我天才！って顔。

「じゃあかわいいから桜、私の膝の上で寝るよろし」

「嫌だよー！」

じゃあ、ってなんだよー！

「…しよーがねーあるなあ。譲歩して我の手のひらの上で踊るでいいあるよ」

「一気に方向性が…！？」

く、黒い…！！

でもそういう黒さをことう所であっさり出してしまってるあたり、本当に腹黒い人ではないんだよね。腹黒いことに変わりないけど。

本当に腹黒い人というのは、耀兄の隣の国みたいな人を指す（内緒だよーでも周知の事実だよー）。

「って、もうこんな時間あるか！」

と、耀兄は自らの腕時計を見て言った直後に、最後に一つ残っていたうさぎりんごを手にした。そしてそれを頬張りながら「もうそろそろ会議あるから、行くあるよ」と立ち上がる（でも食べるんだ…）。

「じゃ、邪魔したあるな！再見！」

「うん、ばいばーい」

うん、本気で邪魔しに来ただけになってるんだけど。うさぎりんごを心行くまで食べて帰っちゃったんだけど。

結局耀兄が何がしたかったのかがさっぱり分からないまま、彼を見送った後、私はまた畳に寝そべり、みかんを片手にゲームを再開したのだった。

『菊兄ー、そろそろ起きなよー』

『…はっ、な、何を言いますか、私は寝てませんよ』

『あー、ソウデシタネ』

『いつの間にこんなに暗く…冬の日は短いものですねえ』

ふゆぞら（後書き）

個人的に『にーに』と呼ぶ妹をそんなかわいいと思えない訳ですが、『にーに』って呼んで！って主張する中国さんが好きです。二次創作ではわりと定番ですよね。

いはるびより（前書き）

台湾ちゃんのターン。

人名勝手に作りました。

いはるびより

外は珍しく暖かなぽかぽか陽気だというのに、菊兄は部屋にこもってうさぎと遊んでいた。遊んでません世話をしてるんですとか言ってたけど、絶対違う。私が時々様子を見に行くと、もふもふうさを撫でて幸せそうにしてるか、うさぎのかわいさに悶えて微動だにしないかのどちらかなんだもの。

確かにうさぎはかわいいけど、やっぱり邪魔するのもあれだし、私としてはほっとかかてる可哀想なぼちくんを散歩させてあげたい。という訳で私は、ぼちくんの首輪にリードを繋げて外に出た。うん、あったかい小春日和だ。雲一つ無い空を見上げて、私が爽やかな気分浸っていると、ぼちくんがぐいぐいリードを引っ張ってくる。かーわいいなあもつ。

そうしてリードを持ち直し、歩き出した時だった。

「好好〜！桜ちゃああん！」

すぐその曲がり角から、美少女が現れた。

「あ、おはこんにちは梅鈴ちゃんメイリン」

ちなみに今の時間はお昼前。なんだけどほとんど昼みたいなものだし、どっちつかずみたいなの。

「奇遇だね〜！運命だよ〜！」

「いや、どう考えても意図的だよね」

私の背後に自宅があるからね。その曲がり角曲がってきたってことは、完全にうち目指してきたよね。

「ワタシたちは運命の赤い糸で結ばれてるネ！」

「それ、色んな意味でまずいよ」

「せっかくだから桜ちゃん、一緒にショッピング行こうよ〜」

目的、それだよな。(この辺住宅街しかないし)

「あー、行きたいっちゃんあ行きたいけど」

と、私はぼちくんを見やって「お散歩行かなきゃだし」と言う。

「じゃあお散歩でいいヨ」

いいのか。

まあでも、梅鈴ちゃんはショッピングに行くつもりでおしゃれしてきてるし(いつもおしゃれだけどさ)、ちょっと足をのばして一緒にお昼でも食べようかな。

私がそう提案すると、梅鈴ちゃんは嬉しそうに頷いてくれた(かわいーなー)。

そこで、ぼちくんがしびれを切らしたように、わんつと一声鳴いた。ごめんよぼちくん、もうちょっと待っておくれ。

私と梅鈴ちゃんは、一旦自宅に戻ってきた。「ただいまー」と言いながら(またすぐ出かけるけど、一応)玄関を開けたけれど、何の返事もなかった。多分、菊兄はまだうさぎと遊んでるんだと思う。ぼちくんを玄関先にお座りさせて、ひと撫でして、帰りが遅くなることを言いに菊兄の部屋に向かう。

そつと襖を開けて見た菊兄は、案の定うさぎに囲まれて微動だにしていなかった(あ、幸せに浸ってるんだよ)。ふにゃーとした表情で、か、かわっ…!!

「菊さああん！なにあれかわいいヨオオオ！」

「あ、うん同感だけど…」

先にそんなテンションで言われると、ね。(梅鈴ちゃん菊兄大好

きだからなー」

と、そんな梅鈴ちゃんの声でこちらに気付いた菊兄に、「ぼちくんのお散歩ついでに梅鈴ちゃんとお昼食べてくるね！」とだけ言っ
て、私は襖を閉めた。いや、あの、後ろの人が暴走寸前なんです大
変なんです。実際に暴走してしまったら、事態の収束にもものすごく
時間と労力が費やされることになるんです。

振り向くと、不満げな梅鈴ちゃんがいた（そんな顔なのにやっば
りかわいい。さすが美少女）。仕方なく私は、普段よりテンション
を高め、「ほらほら！お散歩にれっつらごー！」なんて言いなが
ら彼女の背中を押し（れっつらごー…）、私たちの帰りを今か今か
と待ち構えていたぼちくんを連れて出かけたのだった。

「そういえば」と、お散歩開始一歩目から口を開いたのは梅鈴ち
やんだった（はいよ！色んな意味で！）。

「桜ちゃん、来年はどんな制服にするネ？」

これはいいところに着目してくれた。実はあのワンピースの件に
ついて、おしゃれな梅鈴ちゃんの見解を是非聞きたいと思っていた
のだ。

「次はワンピース型にしようかと思ってるんだけど、どんなのがい
いと思う？」

「それとつてもいいアイデアネ〜！桜ちゃんはかわいいから、なん
でも似合うヨ！」

「それも聞いた」

晩ご飯なんでもいいよーってのがお母さん一番困るんだよ！晩ご
飯じゃないけど！万博Tシャツなんて着るような人と同じって！

「あ、そういえば」と、二度目を言ったのは、私だった。

「耀兄、あの万博Tシャツやたら気に入ってるよね」

「そうアルネ」。あれは確か老師のところで買った万博の、限定版の
記念Tシャツヨ」

「限定版なんだ…」

「こないだワタシが老師に似合いそうなTシャツ持って行った時も、

あれがいいって言ってる着てくれなかったヨ」

大人気ねえ…。梅鈴ちゃんを選んでTシャツっていうんなら、おしゃれに間違いないだろうに。体も頭もかたいなああの入。

ああ、何かやわらかいものが見たい。とか思いながらふと視線を落とすと、短い足を懸命に動かすぼちくんがいた。うがああ、かわいい！（脈絡なんてない！）

「ぼちくん、君はなんてかわいいんだ！」

しかしぼちくんは私をチラ見したただけで、一切のリアクションをしてくれなかった（さつき待たされたのを根に持つてるね、君）。

…くっ、それでもかわいい君はずるい！

「とか言ってる桜ちゃんがかわいいヨ」！

「そんな風に一生懸命主張してくる梅鈴ちゃんもかわいいよ」

「いや、もはやぼちくん含む本田一家がかわいいヨ」！

なんだこの会話。

なんか仲の悪い主婦二人が表面上褒めあいながら、水面下では凄まじい皮肉りあいをしてるみたいだな。

しかし何がすごいって、私と梅鈴ちゃんはそんなひねくれたものではなく、お互い本音を言い合っているだけであることだ。私は本気でぼちくんも梅鈴ちゃんもかわいいと思ってるし、梅鈴ちゃんも本気で私や菊兄をかわいいと思ってる。

「あ、ぼちくん、ちょっと待っててね」

そうこうしていると、目的の店に着いた。外にもテーブルがある店なので、ぼちくんだけ置いて食事、なんてことにはならない。注文をして、それを持って外に戻ってくる。

「今日はあったかいし、いい感じでしょ」

「ん、でもうちの方があったかいヨ」

「あー、そっか」

耀兄のそこは寒いのにね。今度うちに来るネ！ごちそうするヨ！
〜！と言う梅鈴ちゃんに、曖昧に相づちをうつ（だって引きこもりだからね。特に冬は。でも空気は読むよ）。

「…っていつか、そんな目で見ないでぼちくん」
さつきから気になってたんだけど、ぼちくんがすごいきらきらした目でこっち凝視してるんだよね。そんな目で見られても、残念ながら君が食べられるものじゃないんだこれは。と弁解すると、しよぼんとされた。

「そんな気を落とすたねえヨ、ぼちくん」

「その慰め方なんなの梅鈴ちゃん…」

と、まあそんな風にどうでもいい感じの会話でお散歩は終始して梅鈴ちゃんも帰っていったのだけど、ちょっとかわいそうだったかな。今度は私からシヨッピングに誘おう、なんて思いながら、ぼちくんが遅めのお昼ご飯をあげるのだった。

『あれっ、菊兄、まだうさぎと遊んでたんだ』

『遊んでません世話をしているんです』

『ああそう。…お昼ご飯食べた？』

『えっ、もうそんな時間ですか』

『えっ、そんなに夢中になつてたの』

いはるびより（後書き）

原作で日本さんがうさぎ拾いまくって大変なことになっていましたが、人にあげたりで落ち着いて、最終的に数匹いるものと考えてます。あと桜ちゃんは日本さん萌えとか思ってます。彼女はオタクです。

ゆきげしょう(前書き)

香港のターン。

人名勝手に作りました。

ゆきげしょう

外は快晴だった昨日と表情を一転した雪景色で、菊兄は居間で撮り溜めしていたアニメを見ていた。アニメ見るんで邪魔しないでくださいと、これにはさすがの菊兄も言い訳はしなかった。私がいつ様子を見に行っても、常に画面に集中するのみだものね。

確かにアニメはおもしろいけど、やっぱり基本はリアルタイムで見るし、私としては晴耕雨読（雪だけ）、読書をしながら優雅にティータイムとしたい。

という訳で私は、ティータイムのためのお茶請けを作っていた。ここで断っておくけれど、私の言ってるティータイムは、ちゃんとヨーロッパ、もっとというとブリティッシュなものだ。日本人だからってティータイムと呼んで緑茶ないし抹茶とお煎餅もしくはお饅頭をいただくつもりなのではない（緑茶や抹茶も好きだけどね）。

紅茶といえばもちろん、スコーンだ。私は別に料理が下手な人でも、どこかの眉毛でもないの（これらは完全な別物です）、普通のスコーンを作るつもりだ。

しかしそこまで用意するとなると、やっぱり紅茶もおいしいものがない。真っ先に思いついたのは、無論あの眉毛ことアーサーさんだけど…紅茶入れてほしい、だけで呼び出すと怒りそうだしなあ（怒るところわい、というか面倒くさい）。あと万が一私のスコーンに文句付けられて、台所を占領されてしまったらどうしようどころの騒ぎじゃない。死活問題である。

「…で、俺は紅茶淹れるために呼び出された的な？」

「うん、香くんだったら用事がそれだけでも怒らない気がしたから」
「香くんってば」ちよつと来てくれない？あ、お茶の道具は忘れず

にね』と電話すると、二つ返事で用件を何一つ知らないまま、文句も言わずに来てくれるんだもん（いいひと！）。アーサーさんなら電話の時点でアウトだ。その場で用件を問いただされるに違いない。香くんは私の返事に、小さくふんと鼻でため息をついて、

「…別にいいけど」

と言った。彼はそれほど表情豊かではないけれど、心は広い。優しいのだ。

さっそくやかん借りると言って湯を沸かし始めた隣で、私は香くんが来るまでの時間で焼きあがったスコーンをオーブンから出す。

「それ、何？」

「スコーンだけど…？」

「…スコーンでそんな色だったんだ的な？」

「……。」

…眉毛ええええ！

よし、何も聞かないでおこう（空気読んだよ！）。そう心に誓って、私はスコーンの盛り付け作業を始めたのだった。

おいしい紅茶（というか、ミルクティー）とお茶菓子まで用意して、私と香くんだけでそこにいる菊兄を省くなんて、ちょっと非情じゃないか。そう思って私は、菊兄をお茶に誘いに行くことにした（ちなみに読書は中止。…あれ？本末転倒？）。

静かに襖を開けた先には、リモコンを手にしたまま画面を凝視している菊兄の後ろ姿があった。

「…菊兄、お「邪魔しないでください」あ、はいごめんなさい」

私は静かに、全力で静かに、襖を閉めた。

居間でお茶しようと思つてたけど、客間にしよう。

「香くん、お茶運んでー」

台所に戻つた私はそう言つて、香くんが頷いたのを確認し、盆に載せたスコーンを持って客間に向かつた。

「菊さんは？」

「いいの」

「え、そこにいんのに？」

「いいの」

雪が降っているだけあつて、部屋は少しひんやりしている。私は座布団を二枚、机を挟んで向かい合わせになるように置いた。ティータイムと称してスコーンと香港式ミルクティー（ごんせ、なーいちゃー？だつて）を用意し、座布団に座るんだから、考えてみればすごい組み合わせである。でももともと、スコーンと紅茶を座布団に座つていただくこうと考えていたのだから、大して変わりはないだろう。

「いただきまーす」

向かいで香くんが静かに頷く。私は飲む前に、かわいい器に入つた角砂糖を一つ落とす（この入れ物はおの眉：アーサーさんにもらつたものだ）。そうしてゆっくりコップをもたげて、あたたかいミルクティーを口に含んだ。

「…おいしい」

と言つと、香くんは嬉しそうに微笑んで、自分もミルクティーを飲んだ（無糖で飲みよつた）。

「スコーンどうぞ」

勧めながら、私もスコーンを皿に取る。蜂蜜がなかったから、代わりに持つてきた誰かにもらつたメイプル（誰だっけ？）を添えた。今回のスコーンは焼き色がすごくきれいなのだが、とにかく沢山作ってしまった。だから見た目がいいのは結構なんだけど、不味かつたらどうしよう（どきどき）。

「…マジうまい的な」

「あ、これは確かに、我ながら」

どうやら杞憂だったようで、なかなか美味だった。ていうかメイプルうま。…いやしかし、スコーン自体の出来映えもいいというところで、菊兄にあげるのもちろん、香くんに手みやげとして持たせて、それから確か誰かに何かもらったと思うからそのお返しにあげて（誰だっけ？）、あとは眉毛（もう言い直さない）に送りつけてやろうと思う（香くんへの同情から来る当てつけ的な意味で）。

ちよつとした優越感に浸りながら、ミルクティーを飲む。ちよつと考えて、角砂糖をもう一つ追加した。

「ちよ、まだ入れるとか」

「だって練乳なのに甘さが控えめってのが、なんかあれで」

香くんのミルクティーに入ってるミルクというのが、無糖の練乳なんだけど、練乳ってほら、無条件に甘いイメージがあるじゃないか。

「俺は逆に甘い嫌系」

「ああ、っぽいね。…でもいつもは少し入れるよね？」

なんで今日は入れないの？そういうニュアンスで言ってみただけど、無言で目をそらされた。…多分何言っても答えてくれないんだろうなあ。

「あ、そうだ、制服をね、ワンピース型にしようと思うんだけど、どんなのがいいかな？」

仕方ないので話を変えてみた。

それにそろそろちゃんとした答えがほしい。ワンピース型は下手したらダサイから、慎重に選びたいのだ。

「…ぶつちゃ桜はかわいいからなんでも似合う的な」

「……。」

…いや、嬉しいんだがね？

あ、でも、普段からかわいいかわいいうるさい耀兄や梅鈴ちゃんと違って、いつも物静かな香くんに言われると、ちよつと照れるか

も。

「ていうかかなり照れる。えへへ」

「……。」

無言かい。

照れた乙女を放置するとはなにごとだ。えへへとか言っちゃった純真無垢な乙女を放置するとはなにごとだ……！こら、目をそらすな。しかし、その後しばらくは目を合わせてくれないままだった。そこまでいくと却って不思議だ（えへへに引いたとしてもね）。なんなのこの子。

私がお茶を二回お代わりして、一息ついた頃、香くんはじゃあそろそろ帰ると言って立ち上がった。

「スコーン、ごちそうさま」

「お粗末さまでした。香くんもミルクティー、ごちそうさま」

こくり、と香くんは頷いて帰っていった。今更ながら、ああこんな雪の中、私はお茶のためだけに彼を呼び出したのだなと思う。

普通に申し訳なくなりながら、全力で静かに居間に入り、菊兄の隣へそつとスコーンを置いて、それから全力で静かに居間を出て行ったのだった。

『桜、お待ちなさい』

『え、なんですさかうるさかったですかごめんなさい』

『違いますよ。もう別にそこまで気にしなくていいですから、ちょっと緑茶を淹れてきてくださいな』

『緑茶つすか……』

ゆきげしょう(後書き)

香港の口調難しいです。元々そういうイメージがあったのもありますが、すごい無口キャラに…。

今回はそんなコンセプトでもなかったのに、ちょっと恋愛風味入りました。角砂糖の器が、イギリスのものであることに気付いて、ちょっと嫉妬した香港です。

かなりしつこく制服について意見を求める桜ちゃんですが、今彼女の中で最も大きな悩みなのかもしれませんね()

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2932z/>

ひよりみ

2011年12月17日10時45分発行